Ⅳ.
金沢の創造経済

（1）創造経済における工芸の役割

金沢の創造経済とは、すでに述べたとおり、江戸時代からの工芸的生産システムの発展の上に築かれてきた独自の文化的生産システムによるものであり、金沢の現代産業には工芸や職人的なものづくりの精神が様々な影響を与えている。あらためて、この文化的生産システムについて、実例を挙げながら示していきたい。

（地域内発型企業の発展）

明治維新以降、金沢の機械工業の発展の基礎となったのは江戸時代に加賀藩が勧めた工芸であった。また、江戸時代後期に普及した「からくり」などの名工たちの中からも、すでに見た津田駒工業のように、繊維産業の興隆と結びついた自動織機の開発などで新しい道を開くパイオニアが登場した。江戸時代の職人の技能やノウハウが革新されて、近代工業に生かされ発展していったのである。

さらに、工芸的生産に宿る職人気質とその発展がもたらした地域技術の集積は、新しい都市型産業にも引き継がれ、ハイテクを駆使する職人たちに支えられたハイテク産業こそが現代の金沢経済の主役となっている。同時に、大量生産とは異なり、消費者のニーズにきめ細やかに応じる多品種・少量生産やハイタッチな製品を強みとするニッチトップ企業が数多く存在している。

そのような金沢のハイテクベンチャー企業の代表は、パーソナル・コンピュータの周辺機器メーカーとして全国ブランドとなった株式会社アイ・オー・データ機器である。創業者は、国産コンピュータ会社の草分けであった地元企業に就職後、金沢工業大学でコンピュータの開発研究に携わったのち、1976年に自宅ガレージを工場として会社を設立し、地域の基幹産業である繊維工場の稼動監視システムを開発することにより業容を整えた。1984年に独自の方式で増設RAMボードの開発・販売を開始するや、急激に需要が殺到し、オリジナル技術であるIOバンク方式は、RAMボードの「標準規格」となり、市場のトップシェアを占めるようになった。パソコンの普及とともに、開発されるソフトウェアとのメモリー容量のギャップに気づき、周辺機器として職人気質そのままに大手メーカーの入り込めないすき間に巧みに迅速に参入して成功を収めたのである。現在、主力商品は、増設メモリボード、ストレージ、液晶ディスプレイとなっているが、近年はデータとして記録した音楽を再生するMP3プレーヤー、さらにネットワークメディアプレーヤーやワンセグチューナーなどを開発し新分野にも製品群を広げている。

また、繊維工業関連からファッション・ユニフォームという分野に進出した株式会社ヤギコーポレーションは、カタログ販売を武器に業績を伸ばし、自社ブランド製品を開発して、業界のトップシェア企業となっている。同社は、金沢美術工芸大学で工業デザインを学び、最初に就職した電機メーカーでカタログ販売を経験し、その将来性を予見した経営者のもと、ユニフォームという安定した製品に着目し、すき間産業に特化して、そのファッション化、ハイタッチ化により、飛躍的な発展を遂げた。さらに、職人的なものづくりの精神とハイテク技術を融合させ、ユニフォーム業界で初めてデザインから裁断までをコンピュータで一貫管理するCAD/CAMシステムを導入するとともに、多品種・小ロット・短サイクル化に対応できるフレキシブルな物流システムを構築している。また、使用済みの製品を回収して、再生利用するリサイクル方式をとり入れるとともに、ユニバーサルデザインを導入して老人介護や障害者向けの製品開発にもいち早く取り組んでいる。

伝統的な食文化を支えてきた金沢独自の食品産業群やその関連企業にも伝統工芸で培われた職人気質が息づいている。

高度成長期には大量生産、大量販売を展開した酒造メーカーが、その全国シェアを高めた一方で、質的低下をきたし消費者の日本酒離れをもたらしてしまった。これに対して、創業以来380年の伝統と石川県の酒造業界でナンバー１の実績を持つ金沢の福光屋は、自造酒主力のオリジナル化により質を維持し、多品種・少量生産方式で、消費者のニーズに対応した多様な新製品を生み出して好評を博した。さらに、同社は伝統の味を継承しつつ、伝統を革新する戦略をも展開しており、全製品純米化を成し遂げるとともに、コンセプトを明確にした複数の銘柄により消費行動へ積極的にアプローチを図る「マルチブランド」政策を展開している。

このように、工芸におけるものづくり精神は、酒造りにも生きており、大量生産ではない丁寧な手仕事として、伝統の上に革新的な技術を加えているのである。この職人技術に富み、イノベーションを得意とする企業精神は、酒造りにとどまるものではなく、域内の他の産業にも共通したものである。

ボトリングシステムの全国トップシェアを誇り、金沢のハイテク分野の中核企業となった澁谷工業株式会社は、もともと醸造用機械を製作しており、伝統産業が育てたメカトロ産業であるといってもよい。同社は、自動ボトリングシステムの開発に乗り出し、ユーザー毎に仕様の異なる文字通り「一品料理」の仕事に「金沢の職人気質の伝統」を生かすことによって、現在は、この分野における国内市場の約60%のシェアを占めている。新分野への進出も意欲的で、人工透析機のOEM生産を軌道に乗せ、事業所向け廃棄物処理プラントも試作から量産段階に移り、蓄積した技術を土台に環境、医療分野への新展開をめざしている。

澁谷工業㈱　自動ボトリングシステム

さらに、多色刷りで金付けまでする付加価値の高い印刷物である清酒ラベルに着目し、金沢の地酒メーカーのラベル印刷を手がけると、これによって得たデザイン性と技術を活用して、全国の約50%のラベル印刷を受注する業界トップ企業となっているのが高桑美術印刷株式会社である。現在、同社は、包装・パッケージからマーケティングまで総合的な営業を展開し、さらに、企画開発部門を設置し、コンピュータ・ガイドブックの印刷などデザイン性・美術性のある印刷物を作り、一層の高付加価値化をめざしている。また、1995年度からは石川県の伝統工芸・芸能をデジタルコンテンツで記録保存するデジタルアーカイブ「新石川情報書府」事業に参画し、高精細画像とデザイン力で評価を高めている。

高桑美術印刷㈱　ラベル印刷

この他にも、多品種少量生産で、文字通り「ハイテク時代の職人的生産」のリーダーとして活躍している多くのメーカーがそれぞれの分野で全国のトップシェアを誇っている。例えば、コンベア機械の株式会社石野製作所は1974年に回転寿司コンベアの生産を開始すると、自動給茶装置の開発や寿司ロボットの開発で業界のトップメーカーとなり、同社の自動給茶装置付き寿司コンベア機は、柔軟な発想と確かな技術により、国内外でシェア60%を占めている。

このように金沢に宿る工芸の職人気質と結びついて発展してきた食品関連機械工業は、地元のソフトハウスやシステムハウスのベンチャー企業に、さらなる発展の可能性を切り開いている。

㈱石野製作所
自動給茶装置付寿司コンベア機

そして、これらの企業が有機的に結びついて発展してきたことが、金沢の創造経済の大きな特長である。つまり、繊維工業と繊維機械工業が相互に支え合いながら、金属や縫製、印刷などの都市型工業が地元中小企業の手で発展し、さらに、その技術やノウハウが、ハイテクを駆使した近代産業に継承され、多様なニッチトップ企業が輩出されてきた。例えば、先述のとおり、アイ・オー・データ機器は、地域内発型の有力オフィス・コンピューター・メーカーである株式会社PFUからのスピンアウト組で、金沢の基幹産業である繊維工場のシステム開発から発展し、パソコン周辺機器の分野で市場のトップを占めるようになった。このような域内企業の有機的な結びつきが、それぞれの産業が相乗効果を生み出すとともに、新たな分野への転換と産業構造の多角化、ひいては地域経済の安定を導いてきた。さらに、この地域内発型企業の発展力が、外来型の大規模工業開発を抑制し、産業構造や都市構造の急激な転換を回避したことにより、地域外から稼いだ所得が域内で循環することとなり、これが新たな文化的投資と文化的消費に向かっているのである。実際、金沢の卸売・小売りをあわせた人口一人当たりの商品販売額は、全国平均の約4.2百万円に対し、その1.5倍の約6.5百万円となっており、域内取引がいかに旺盛になされているかがうかがえる。

（文化的投資･消費）

金沢では、行政による文化政策のみならず、様々な民間による文化的投資が積極的になされている。

そのような取組の先頭に立つ若手経営者らは、地域内発型イベントとして全国的に評価の高い「フードピア金沢」をプロデュースしている。全国から文化人が招かれ、地域の人々との交流の機会を生み出している。イベントでは、金沢の食文化のみならず、美術・工芸や現代アート等に関する様々な議論が繰り広げられる。毎年食材の豊富な冬に開催され、全国から集まった文化人・知識人達の情報発信力でフードピアは成功をおさめ、冬枯れの時期に観光客を増加させているだけでなく、金沢経済界の地域アイデンティティを呼び覚まし、活性化するという経済効果をもたらしている。まさに、「文化が経済活動をリードするイベント」である。

その他の企業も文化的投資に積極的に取り組んでおり、工芸の支援に積極的に取り組んでいる中村酒造は、先代の社長が有する家屋と美術工芸品を金沢市へ寄付し、金沢市立中村記念美術館の礎とした。

また、江戸時代からの歴史を持つ大野の醤油業者たちは、地元の商工会を中心に使われなくなった醤油蔵を活用したまちづくりの運動を展開している。1998年に手始めに空き蔵をギャラリーと喫茶店に模様替えした「もろみ蔵」を開館し、２年後には二つ目の空き蔵を「創作工房oxydol」に改装し、金沢美術工芸大学を卒業した若手アーティスト３人を招いた。醤油が染み込んで濃い茶色に輝く太い柱や梁がアーティストの創作意欲を刺激し、同時に地域住民との交流の場が広がっている。また、江戸時代末期に大野で活躍した家具や机、木箱などの生活用品を作る職人であったからくりの名工・万能の才人、大野弁吉を記念する「大野からくり記念館」を建設するなど、地域文化の伝承に努めている。

さらに、地域の老舗が、自発的に地域の伝統文化の継承や活性化を企図して、加賀友禅の生産行程である友禅流しなどが披露される催事、浅野川園遊会をプロデュースしている。毎年春、浅野川沿いに繰り広げられる園遊会は、すでに20年以上の歴史を持ち、市民に親しまれる春の催しとして定着している。

他方、消費の面からも、文化性や芸術性に富んだ財やサービスを享受する消費者によって、消費市場の高質化が図られ、文化的生産を喚起している。

これらは指標にも表れており、金沢の人口一人当たりの課税対象所得額が、全国の自治体平均と同じ約1.4百万円であるのに対し、人口一人当たりの小売業の年間商品販売額は全国平均のおよそ1.3倍の約1.3百万円となっている。これは消費者所得が同一水準であるにもかかわらず、商品販売額が全国より高くなっているということであり、商品の高質化がうかがえる。

さらに、高い文化性と芸術性を求める金沢の高質な消費市場で成功を収めた催しのひとつとして、「ラ・フォル・ジュルネ金沢『熱狂の日』音楽祭2008」が挙げられる。「ラ・フォル・ジュルネ」は、毎年、ナントで開催されるフランス最大のクラシック音楽の祭典で、これまでにフランス国外の都市では、ポルトガルのリスボン（2000年～）、スペインのビルバオ（2002年～）、東京（2005年～）が開催地となってきた。2008年４月、金沢がこれに加わり、「ベートーヴェンと仲間たち」をテーマに３日間にわたって開催され、フランスやドイツ、スペインなど世界各国から一流の音楽家が集い、予想をはるかに上回る約８万５千人の聴衆が訪れている。

ラ・フォル・ジュルネ金沢
『熱狂の日』音楽祭2008

（新たな創造産業の展開）

このような文化的生産システムの中で、従来のハイテク産業やメカトロ産業に加え、コンテンツ産業などの新たな創造産業が生まれてきている。一例として、高桑美術印刷は、近年、ホームページ作成やＢＳデジタル放送の番組企画・作成事業を推進するため、メディアラボとクリエイティブラボを創設し、最新型の映像編集システムを導入・本格稼働させており、マルチメディア・コンテンツ分野にも本格的に進出した。

また、民間企業と行政が一体となり、デジタルネットワーク社会の中で、新しい文化価値を創造するために、デジタルクリエーターの祭典、「eAT KANAZAWA（イート金沢）」が1997年から開催されている。毎年、世界からエレクトロニックアートの第一人者を迎え、フォーラムやアワード、セミナー等を行っており、言語や国境を越えて様々な人が金沢の地に集い、交流することにより、デジタル分野はもちろん、伝統工芸をはじめとする地場産業と先端技術のコラボレーションによる新産業の発展をもたらしている。

（2）官民一体となった創造都市への取組

金沢市はすでに、経済界と市民、行政が手を携えて、官民一体となった創造都市への取組を進めている。

なかでも、金沢経済同友会が市民に呼びかけて開始した金沢創造都市会議において、金沢の創造都市戦略は討論され、練り上げられてきた。この会議は21世紀の都市のあり方をグローバルな視野から探求し、新しい都市政策の形成とそのための実験の場を金沢が提供するという意気込みで、2001年から隔年開催で開始された斬新なスタイルの都市会議である。

1997年、金沢創造都市会議は創立40周年を迎えた金沢経済同友会の記念事業として始まるのであるが、経済人が自らの事業の利害を超え、長期的視野から都市政策を構想するものとして、ユニークで高いレベルの内容のものであり、準備段階を含めると、すでに10年以上の歴史がある。

その第１回は2001年、「記憶に学ぶ」をテーマに都市としての金沢の歴史・伝統を振り返り、「都市の記憶と人間の創造力」について考察を行い、その際立った都市の個性を新世紀に引継ぎ、さらに洗練させる目的で「金沢学会」の設立が提唱された。

2002年にはそれを受けて第１回の金沢学会が開かれ、「美しい金沢」を理念とする都市再生プランが提案され、その社会実験を検証する場として創造都市会議と金沢学会をそれぞれ、隔年開催10年間継続することが確認された。すなわち、ビエンナーレとして取り組むことになったのである。

2005年の第３回創造都市会議のテーマは「都市遺産の価値創造」で、都市が歴史的に保存してきた文化遺産のみならず、近代産業遺産やバブル経済の遺産なども創造的に活用する方策を検討するために「都市遺産の使いみち」、「都市遺産で演じる」、「都市遺産からの刺激」の３つの分科会が開かれ、あわせて、金沢らしいライトアップや中心市街地でのオープンカフェなどの社会実験の模様が報告された。また、2006年の第３回金沢学会は「都市の引力」をテーマに開催され、2014年に予定されている北陸新幹線の開業に伴って生み出されるプラスとマイナスの効果を予測しつつ、都市金沢の魅力を再発見し、発信することの重要性が確認され、金沢らしい風情を残すために、存続の危機にある和風旅館を保存するための緊急施策が提案された。

そして、昨年の第４回創造都市会議は「都市間競争」をテーマに、世界的にクリエイティブ・クラスの誘致を巡る競争激化が予測される中で創造都市の連携を考える一方、「金沢をうたう、みる、あそぶ」の３つの視点から捉え直し、世界的な創造都市としての評価を確立することが提唱された。

この会議では、実行委員として著名な都市研究者や文化人のほか、地元からは経済人や市民、そして金沢市長をはじめ行政のリーダーたちも加わり、社会実験の結果や視野の広い討論を踏まえながら、創造都市をめざす総合的な取組が推進されている。ユネスコの提唱する創造都市ネットワークへの申請により、官民連携による工芸都市づくりへ向けて、金沢創造都市会議の活動は、新たに大きな一歩を踏み出すこととなる。

さらに、今般のクラフト都市への申請にあたっては、行政と工芸団体、経済団体、市民団体からなる金沢創造都市推進委員会が組織されており、本年10月には、この推進委員会の主催により、創造都市ネットワーク登録都市であるサンタフェ（フォークアート）やベルリン（デザイン）、ボローニャ（音楽）を招聘し「世界創造都市フォーラム2008 in KANAZAWA」が開催された。その中で採択された「金沢アジェンダ」においても、“公共、民間、市民セクターの連携による都市問題の創造的解決”と官民連携が謳われている。この世界創造都市フォーラムは来年度以降も継続して開催することとしており、官民連携の組織によるユネスコ創造都市との交流を推進していく。

特に、本フォーラムでフォークアート都市であるサンタフェから発表があった「クリエイティブ・ツーリズム」については、今後とも、サンタフェをはじめとするネットワークメンバーと互いの観光政策や観光商品に関する情報交換等を進め、工芸作家や旅行業者と連携したツーリズム形態を深化させていきたいと考えている。

また、工芸分野においては、先述したとおり、既に10年以上にわたる官民連携のフォーラムがある。このフォーラムをこれまでの実績を踏まえ拡充し、2010年には、金沢の工芸の伝統的技法、技術の継承・発信と後継者の人材育成を強化すべくゲストキュレーター企画による世界と金沢の工芸品選抜展覧会である「金沢・世界工芸トリエンナーレ」として、世界創造都市フォーラムと連携させて開催することとしており、多面的に工芸における官民パートナーシップの推進を強化していくものである。